

2018年度「国際交流基金賞」受賞者決定 多和田葉子氏、細川俊夫氏、サラマンカ大学スペイン日本文化センター

国際交流基金が実施する2018年度「国際交流基金賞」の受賞者が、下記の通り決定しました。

「国際交流基金賞」は、1973年以降、毎年、学術や芸術などのさまざまな文化活動を通じて、日本と海外の相互理解促進に顕著な貢献があり、引き続き活躍が期待される個人または団体に対して授与します。第46回となる今年度は、内外各界の有識者及び一般公募により推薦のあった72件から、有識者による審査を経て3件が決定。10月に実施する授賞式で正賞（賞状）と副賞（300万円）を授与します。

記

受賞者／授賞理由

■多和田 葉子（小説家、詩人）〈日独バイリンガル作家〉

日本とドイツの間で国と言語の境界を越えて自由に行き来しながら、詩と小説を書き続けてきた日独バイリンガル作家。多和田文学をめぐる国際会議や学会が欧米や日本で何度も開催され、国と言語を越えた国際コミュニケーションを活性化させることで、国や文化の壁を越えた相互理解の促進に大きく貢献。今後さらに前人未踏の道を突き進み、ますます豊かな言葉の音楽をもたらしてくれることを期待する。



© Yves Noir

■細川 俊夫（作曲家）〈世界で活躍する現代日本を代表する作曲家〉

ヨーロッパと日本を中心に創作活動を展開し、欧米の主要な音楽祭、オーケストラ、歌劇場、アーティストたちから委嘱を受け、確固とした地歩を固めてきた作曲家。オペラ『^{はんじょ}班女』、『^{まつかぜ}松風』といった作品は、世界一流のアーティストによって初演され、いずれもレパートリーとして定着、世界中で再演され続けている。細川氏の音楽は日本人が決して忘れてはならないメッセージを内包し、世界各地で演奏され、国際相互理解の促進に貢献。今後益々の活躍を期待する。



© Kaz Ishikawa

■サラマンカ大学スペイン日本文化センター〈スペインの日本文化発信の中心地〉

サラマンカ大学は、ヨーロッパでも最古の大学のひとつとして世界の学術を主導してきた学術・国際交流の拠点。世界で唯一皇后陛下のお名前を付けることが許可された文化施設「美智子さまホール」および日本関係図書を収蔵した図書館を有する。スペイン日本文化センターは、長年にわたって、学術・文化交流を通じて日西友好、国際相互理解に貢献してきた。本年は、日本スペイン外交関係樹立150周年およびサラマンカ大学創立800周年にあたり、今後いっそうの未永き発展を期待する。



「国際交流基金賞」過去の受賞者（カッコ内は授賞した年）

黒澤 明（1982年）、Donald・キーン（1983年）、小澤 征爾（1988年）、武満 徹（1993年）、團 伊玖磨（1998年）、宮崎 駿（2005年）、村上 春樹（2012年）、富田 勲（2015年）など

以上

■多和田 葉子 (小説家、詩人) 【日本】 Yoko Tawada (Poet and Writer) [Japan]



【授賞理由】

多和田葉子氏は 1982 年以來ドイツに生活の中心を置き、ドイツと日本の間で国と言語の境界を越えて自由に行き来しながら、詩と小説を書き続けてきた。日本語とドイツ語の両方で行われてきたその創作は、ドイツでも日本でも高く評価され、両国ですでに数々の権威ある賞を受けている。このようなバイリンガル作家は、近代日本史上前例のないユニークな存在であると同時に、今後の世界文学の一つの方向性を鮮やかに予告するものでもある。

多和田氏は日本語とドイツ語で作品を別々に書いただけでなく、自作を日本語・ドイツ語間で自ら翻訳したり、さらには二言語でほぼ並行して一つの作品の二つのバージョンを書いたりするなど、多様な形で両言語の間の領域を探索してきた。また世界中で精力的に朗読活動を続け、その回数はすでに 1,000 回を越えている。

この精力的な活動を通じて、多和田氏の作品は世界の読者の注目を集め、多くの外国語に翻訳されるようになった。また、多和田文学をめぐる国際会議や学会もすでに欧米や日本で何度も開催されている。こうして多和田氏は自らの創作を通じて、国と言語を

越えた国際コミュニケーションを活性化させてきた。

二ヶ国語で創作し、国境を越えて活動する多和田氏は、文学に新しい越境的な領域を切り拓き、ともすればいまだに言語の壁の中に閉ざされがちな日本文学の境界を広げてきた。多和田氏は、母語の内と外で響く不思議な言葉の音楽に耳を澄まし、言語と言語の間に広がる沃野での冒険を楽しみながら、人間存在の不条理や可笑しさや恐怖の深みに我々を連れていってくれる。それは実験的でありながら、深く人間的な 21 世紀の文学の世界である。

このような多和田氏の国際的作家活動は、国や文化の壁を越えた真の相互理解の促進に貢献してきた。多和田氏が今後さらに前人未踏の道を突き進み、私たちに今後ますます豊かな言葉の音楽をもたらしてくれることを期待して、ここに国際交流基金賞を授与する。

【略歴】

1960 年、東京都中野区生まれ (58 歳)。国立第五小学校、国立第一中学校、都立立川高校を経て、早稲田大学第一文学部ロシア文学科卒業後、1982 年、父が飯田橋で経営するエルベ書店の取引先であったハンブルグの書籍取次ぎ及び輸出会社グロッツハウス・ウェーグナー社に研修社員として就職。仕事をしながらハンブルグ大学でドイツ文学を学び、日本語、ドイツ語で詩作、小説、エッセイ、戯曲などを創作。ハンブルグ大学大学院修士課程修了。チューリッヒ大学博士課程修了。ドイツで 1987 年に初めて詩集を出し、日本では 1991 年に小説『かかとを失くして』(群像新人文学賞)でデビュー。以後、『犬婿入り』(1993 年芥川賞受賞)、『ヒナギクのお茶の場合』(泉鏡花文学賞)、『容疑者の夜行列車』(伊藤整文学賞、谷崎潤一郎賞)、越境と言語についてのエッセイ『エクスフォニー』、白熊三代記『雪の練習生』(野間文芸賞)、殺人犯たちとの出逢いを描いた『雲をつかむ話』(読売文学賞、芸術選奨文部科学大臣賞)、福島以降の日本を舞台にした『献灯使』、ベルリンの町を描いた『百年の散歩』、最新作『地球にちりばめられて』などを発表。ドイツ語で創作した作品群に対しては、1996 年にシャミッソー賞、2005 年にはゲーテメダル、2017 年にはクライスト賞が与えられた。2006 年より、ベルリン在住。1987 年以降、ヨーロッパ、アジア、アメリカ、アフリカ、オーストリアなどで 1,000 回以上の講演、朗読、パフォーマンス、ワークショップなどを行なった。

【写真】 Yves Noir

■細川 俊夫（作曲家）【日本】 Toshio Hosokawa (Composer) [Japan]



【授賞理由】

細川俊夫氏は、ヨーロッパと日本を中心に創作活動を展開し、欧米の主要な音楽祭、オーケストラ、歌劇場、アーティストたちから委嘱を受け、確固とした地歩を固めてきた日本を代表する作曲家である。

細川氏は 1976 年から 10 年間ベルリン芸術大学で作曲を学んだ。1980 年、ダルムシュタットの夏期講習で作品を発表して以来、世界が待望する作品を次々と発表してきた。2004 年のエクサンプロヴァンス音楽祭委嘱によるオペラ『班女』、2005 年

のザルツブルク音楽祭委嘱のオーケストラ作品『循環する海』（ウィーン・フィル世界初演）、2011 年のモネ劇場委嘱によるオペラ『松風』（能「松風」をオペラ化、サシャ・ヴァルツ演出）、ベルリン・フィル、バービカン・センター、コンセルトヘボウ共同委嘱による『ホルン協奏曲 ― 開花の時 ―』といった作品は、世界一流の指揮者や演奏家たちによって初演、成功を収め、いずれもレパートリーとして定着、世界中で再演され続けている。

「人は自然との一体感を求めているのに、人間そのものが自然を壊しつつあるという現実が創作のテーマ」とインタビューで語るなど、細川氏は森羅万象、自然界に起こるさまざまな音を聴きとり、救いのない状況への想いと共に譜面に織り込んできた。東日本大震災で受けた衝撃は、ヴィオラのための『哀歌』（2011 年）、オーケストラのための『瞑想』（2012 年）という犠牲者追悼の音楽となり、ソプラノとオーケストラのための『嘆き』（2013 年）とオペラ『海、静かな海』（2014 年）では震災の津波でわが子を失った母親を題材としている。そして今年 7 月、シュトゥットガルトで「チリの地震」を題材にした 6 作目のオペラ『地震、夢』が初演された。

細川氏の音楽はまさに日本人が決して忘れてはならないメッセージを内包し、世界各地で演奏され、国際相互理解の促進に貢献してきた。今後益々の活躍を期待して国際交流基金賞を授与する。

【略歴】

1955 年、広島生まれ(62 歳)。1976 年から 10 年間ドイツ留学。ベルリン芸術大学でユン・イサンに、フライブルク音楽大学でクラス・フーバーに作曲を師事。1980 年、ダルムシュタット国際現代音楽夏期講習に初めて参加、作品を発表する。以降、ヨーロッパと日本を中心に、作曲活動を展開。日本を代表する作曲家として、欧米の主要なオーケストラ、音楽祭、オペラ劇場等から次々と委嘱を受け、国際的に高い評価を得ている。2012 年にはドイツ・バイエルン芸術アカデミーの会員に選出された。2012 年秋、紫綬褒章を受章。現在、武生国際音楽祭音楽監督、東京音楽大学およびエリザベト音楽大学客員教授。

【写真】 Kaz Ishikawa

■サラマンカ大学スペイン日本文化センター【スペイン】

Spanish-Japanese Cultural Center of the University of Salamanca [Spain]



【授賞理由】

本年創立 800 周年を迎えたサラマンカ大学は、ヨーロッパでも最古の大学のひとつとして、中世以来現代にいたるまで、長らく国際法、哲学、文学などの分野で世界の学術を主導してきた学術・国際交流の拠点である。日本とスペインが外交関係を樹立して以来、日本から数多くの研究者、大学生、外交官（候補生）を受け入れてきたことでも知られる。

天皇皇后両陛下は皇太子時代を含めて同大学を二度訪問されており、ご訪問を契機に 1999 年に創られ、来年設立 20 周年を迎える同大学「サラマンカ大学スペイン日本文化センター」は、世界で唯一皇后陛下のお名前を付けることが許可された文化施設「美智子さまホール」および日本関係図書を収蔵した図書館（林屋永吉大使日本研究図書館）を有し、スペインと日本の関係を維持強化する上で一貫して中心的な役割を果たしてきた。

スペイン日本文化センターでは、日本語教育や日本文化の紹介事業、歴史、政治、外交、社会に関するセミナーなど、極めて質の高い交流、普及活動を年間を通じて広範かつ活発に行っている。毎年行われる日本文化週間では、在スペイン日本国大使館、国際交流基金の全面的な協力のもと、スペイン人学生にとどまらず同大に滞在する世界各国の研究者や留学生、市民の参加を得て、日本文化の普及に資する多くの事業を展開している。2017 年には、学長はじめ大学関係者も参加して、第 4 回スペイン日本語教師会シンポジウム、日本人形展、基金主催巡回展「新・現代日本のデザイン 100 選展」など数多くの催しが実施された。これらの活動により、同センターはいまではスペインの内外で高く評価されるに至っている。

スペイン日本文化センターは、このように長年にわたって、学術・文化交流を通じて日西友好、国際相互理解に貢献してきており、その業績は国際交流基金賞にふさわしい。日本スペイン外交関係樹立 150 周年およびサラマンカ大学創立 800 周年にあたる本年、今後いっそうの未永き発展を期待し、国際交流基金賞を授与する。

【写真】サラマンカ大学スペイン日本文化センター正面

■国際交流基金について (<http://www.jpf.go.jp/j/index.html>)

国際交流基金は世界の全地域において、総合的に国際文化交流事業を実施する日本で唯一の専門機関です。1972 年に外務省所管の特殊法人として設立され、2003 年 10 月 1 日に独立行政法人となりました。海外に 24 か国・25 の拠点をもち、「日本の友人をふやし、世界との絆をはぐくむ」をミッションに掲げ、世界の人々と日本人の間でお互いの理解を深めるため、さまざまな企画や情報提供を通じて人と人との交流をつくりだしています。